

令和4年度  
第2回北海道スポーツ推進審議会

会 議 録

日時：令和4(2022)年8月30日(火) 13時30分開会  
場所：かでの2・7 5階 510会議室

## ○開会

### 【事務局（阿部スポーツ振興課長）】

それではお時間となりましたので、ただいまから平成4年度第2回北海道スポーツ推進審議会を開催いたします。

私は進行を務めさせていただきます北海道環境生活部スポーツ局スポーツ振興課長の阿部と申します。よろしくお願いいたします。

開会に当たり、北海道環境生活部スポーツ局長の高見よりご挨拶申し上げます。

## ○挨拶

### 【高見スポーツ局長】

高見でございます。皆さんお疲れ様でございます。

令和4年度第2回の北海道スポーツ推進審議会の開会にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

本日はご多忙の中、審議会にご参加いただき誠にありがとうございます。

全国的に新型コロナウイルス感染症が拡大していることから、今回はこの審議会としては初になると思いますが、対面とリモートによるハイブリット開催をさせていただきます。

さて、北海道のスポーツに関する最近の動きとして一つご紹介させていただきますが、7月に「北海道スポーツの未来を拓く集い」を開催したところでございます。この集いは、東京、北京のオリパラ大会で活躍された北海道ゆかりのメダリストの方にご参加いただくとともに、新たに制定いたしましたスポーツに関する北海道の条例の周知や、オール北海道で本道のスポーツ振興に取り組む「北海道スポーツ未来会議」の設立のセレモニーを行ったところでございます。お手元にチラシとツイッターなどのご案内を配っておりますので、是非、フォローなどをお願いします。リモートの方は後程メールでお知らせさせていただきますと思います。会長からは見えないかもしれませんが、未来会議のロゴマークなども制定して、オール北海道で、道内の179市町村の皆さんにご参画いただいた形で、スポーツ北海道を連携していこうということで、知事を会長に取組みを進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

さて、本日の審議会は、ご承知のとおり第3期の北海道スポーツ推進計画の策定に向け、前回皆様からいただきましたご意見を踏まえ、我々事務局の方で、計画の骨子案を作成したところでございますので、それについてご議論いただくこととしております。その他、北海道スポーツ賞の奨励賞候補者の選考について、ご審議をいただくこととしております。それぞれご専門の立場から、忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます。

委員の皆様には、今後ともスポーツの推進に向け、お力添えを賜りますよう改めてお願い申し上げます。簡単でございますが、開会の挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

### 【事務局（阿部スポーツ振興課長）】

それでは続けてまいります。今回初めての本審議会にご出席いただく委員の方がおられますので、ご紹介いたします。

石井委員でございます。それでは簡単で結構ですので自己紹介を兼ねてごあいさついただければと思います。

### 【石井委員】

はい。北海道サッカー協会専務理事の石井です。よろしくお願いいたします。

私は、2020年6月に、この職につきまして、それまではコンサドーレ札幌を初め、Jリーグのプロクラブで強化の仕事をしていました。2020年から携わっているわけですが、いきなりコロナになりまして、この2年間はほとんどコロナ対策をやっていました。

これから事業が始まりますが、今までの経験を生かしながらやっていきますので、よろしくお願ひします。

#### 【事務局（阿部課長）】

ありがとうございました。駒井委員、山崎文子委員、小林委員につきましては、所要により本日欠席ということになっております。

続いて、北海道スポーツ推進審議会についてのご説明をさせていただきたいと思ひます。当審議会は「スポーツ基本法」第31条及び「北海道スポーツ推進審議会条例」により、知事の諮問に応じ、スポーツの推進に関する重要事項を調査審議することを目的として設置されております。

「北海道情報公開条例」第26条により、本日の審議会は公開といたします。

なお、同条ただし書により、会議を公開することが適当ではないと認められるときは、この限りではないとの規定がありまして、手続きにつきましては、「附属機関の設置又は開催、運営に関する基準」第3の3（4）5に基づき、会長が会議に諮り、取り扱いを決定するとありますので、後程ご審議いただくこととしております。

また、会議録につきましては、「附属機関の設置又は開催、運営に関する基準」に基づき、非公開部分を除き、行政情報センターで閲覧に供するほか、このホームページで公表いたします。

続いて、会議の成立についてのご報告でございます。

本日はリモートでのご参加を含め、12名の委員の方にご出席をいただいております。全委員15名の2分の1以上の出席で、会議が成立ということになりますので、本日の会議が成立していることをご報告申し上げます。

終了時間は概ね15時30分を予定しております。

#### [資料確認]

それではこれから議事の進行に入っていきたいと思ひますが、ここからは、生島会長にお願いをいたします。それでは会長よろしくお願ひいたします。

#### ○議事

##### 【生島会長】

はい。それで議事に入りたいと思ひます。よろしくお願ひをいたします。

議事の進め方でございますけれども、お手元の次第に沿って、審議事項を順番にお諮りをいたします。それぞれの議題について、事務局から説明を受けた後、委員各位からの質問やご意見をお受けいたします。審議事項には質問終了後、採決を行います。

次であります。事務局から説明がございましたように、北海道情報公開条例第26条により会議は公開となりますが、審議事項2は候補者の個人情報を含んでおり、同条ただし書きにより、非公開にしたい。前回も同じ取扱いをいたしました。前回同様、非公開としたいと思ひますが、ご異議ございませんか。

（異議無しの声）

ありがとうございます。ご異議なしと認めます。したがって、審議事項2は非公開とい

たします。傍聴及び報道機関の皆様におかれましては、審議事項1終了後の退室をお願いいたします。それではさっそく審議に入ります。審議事項1について、事務局から説明をお願いします。

・審議事項1 第3期北海道スポーツ推進計画の策定について

【事務局】

第3期北海道スポーツ推進計画の策定について説明いたします。資料1-1「第3期北海道スポーツ推進計画の策定について」を御覧ください。

この資料では、今後の審議会を進め方及び本日第2回審議会の内容、流れについてご説明いたします。「1 北海道スポーツ推進審議会の進め方」ですが、6月に開催いたしました第1回審議会において、国の基本計画や道の条例と対比した上で第3期計画の全体構成（骨格）を提示させていただき、5つの柱立てに沿った検討を進めていくこととさせていただいたところです。

審議会では各委員からスポーツを取り巻く状況や課題などについて、様々なご意見を伺うことができました。伺ったご意見については資料1-2として取りまとめておりますので、後ほどご覧いただければと思います。

本日の第2回審議会は、前回のご意見等を踏まえ、スポーツを取り巻く環境からめざす姿への政策の展開方向などを整理した「骨子案」についてお示ししたいと思います。

また、本会議に先立ち、会長と進め方について打ち合わせをさせていただき、計画の範囲が多岐に渡るため、重要なテーマについて審議をいただき、それ以外の項目については、会長と事務局で整理を進めるなど、効率的に進めたいと考え、本日は、3つのテーマで意見交換をさせていただきたいと考えております。

本日のテーマに、他の項目を加えた全体構成について別途意見照会をさせていただき、10月の最終の第3回の審議会までに、取り組みの施策など細かい部分を盛り込んだ「素案」を整理したいと考えております。

その上で、パブリックコメントを実施し、幅広く道民の皆様からご意見いただき、その内容を反映した計画の案をまとめて報告させていただきたいと考えております。

3月には計画決定と考えておりますのでよろしくお願いいたします。

続きまして、資料1-3「第3期北海道スポーツ推進計画（2023-2027）骨子案」をご覧ください。

前回、スポーツの参画人口が減少していることなどについて、たくさんのご意見をいただきました。こうしたスポーツを取り巻く環境の変化を踏まえて、計画の目指す姿へのつなげ方、考え方などを資料として取りまとめました。

上段に、政策の展開方向の考え方としておりますが、現状から目指す姿への流れ、動きを大枠で示しています。

第2期計画では、ラグビーワールドカップ2019など、スポーツビッグイベントでスポーツの注目の高まりを好機ととらえ、目指す姿「スポーツ王国北海道」につなげていくとしておりました。

右側の「取り巻く環境」になりますが、コロナ禍による日常生活、社会経済活動への打撃、東京、北京大会でのどさんこ選手の活躍、北海道の豊かな自然環境、プロスポーツチームの応援の輪の広がり、北海道の総人口の減少。運動部活動改革に伴う、子どもたちのスポーツ機会、環境確保が課題であるなど、こうした情勢がコロナウイルスの発生や北海道の総人口の減少など、現在将来の課題をスポーツの持つ力と、北海道の潜在力で打破し、目指す姿、スポーツを通じた将来にわたる持続可能な社会の実現につなげていくという内容になっております。

なお、スポーツの持つ力、北海道の潜在力、将来にわたる持続可能な社会という言葉は、北海道スポーツ推進条例から検討しております。

資料中段には、施策の展開方向として、基本方針について、5本の柱ごとにその内容を構成する項目を記載するとともに、網線部分に今後の取り組みの方向性として、これまでと違う要素の主なものを記載しております。

柱の1つ目は、前回の意見を踏まえ、ライフステージに応じたスポーツのあるくらしの充実に、スポーツ参画人口の拡大を追加させてもらっています。

項目として、(1)でライフステージに応じたスポーツ活動の推進、(2)子どものスポーツ、(3)スポーツに親しむ環境、場、(4)スポーツ応援・観戦機運の醸成で構成し、今後の取り組みの方向性としては、地域のスポーツ環境充実に向けた人材・場の確保、拡充を例示するほか7月17日に設立しました官民連携組織「北海道みらい会議」による気運醸成に関する協働の促進などを記載しています。

2つ目、地域の活性化と共生社会については、前回のご意見を踏まえ、北海道ならではの特色を生かしたという表現を加えさせていただいております。

今後の方向性としては、来年の開業予定の北海道ボールパークFビレッジといったスタジアム等を核としたまちづくりへの協力のほか、障がい者スポーツの情報発信、理解促進と多様な主体の支援の輪の拡大と団体の活性化、相互連携の促進を記載しています。

柱の3、どさんこ選手の国際競技力向上と継続には、国等に対し、冬季版ハイパフォーマンスセンターを北海道に設置して欲しいという働きかけを行うと記載しているほか、女性アスリートや多様な性のあり方に関する理解促進を記載しております。

柱の4つ目、スポーツの安全、安心確保とささえる環境づくりに関しては、国が競技団体に対して暴力行為等の根絶やコンプライアンス意識の徹底などの規範の策定を進めておりますが、このガバナンスコードの策定公表を促進していくこと、また、セカンドキャリア形成に向けた引退選手の活躍機会の拡充などについて記載しております。

柱の5つ目、オリパラ競技大会のスポーツレガシーの継承・発展については、柱1～4について、東京・北京で高まった気運を一過性のものにしない取組の継承と継承・発展を目指すことを記載しています。

この骨子案については、前回、そして、本日の審議会のご意見を踏まえながら、今後は、10月に素案として取りまとめたいてと考えておりますので、よろしく願いいたします。恐縮ですが、先頭の資料1-1に戻ってください。

先ほど申し上げましたが、テーマを絞ってご意見いただくため、資料後段2(2)に3つの重要なテーマを掲げております。

1つ目として、スポーツ参画人口の減少についてです。前回審議会でも一番の課題として多くの意見があったテーマです。北海道の総人口が減少していることに加え、コロナウイルスの影響により、スポーツ参画人口の減少が大きく懸念されるものととらえております。

2つ目として、子どものスポーツ、または、スポーツに親しむ環境・場についてです。国において、学校部活動改革の地域移行が検討されておりますが、前回ご意見があったとおり、子どもたちのスポーツを取り巻く環境が大きく変わろうとしています。

将来にわたり、スポーツに継続して親しむことができる機会や環境の確保が重要と考えておりますが、これについてご意見いただきたいと思っております。

最後3つ目として、障がい者スポーツなどの推進についてですが、障がい者スポーツを取り巻く環境は健常者のそれと比べ厳しい状況となっており、これまでの障がい者自身にスポットを当てていた障がい者スポーツ施策の対象を健常者に広げ、理解や支援の輪を拡大させていこうと考えており、委員の皆様のお考えをいただきたいと考えております。

この3つのテーマについては、資料の最後に国の計画からの抜粋と北海道の現状などを

「参考資料」として添付しておりますので、意見交換の際の参考としていただければと思います。事務局からの事前の説明は以上となります。

#### 【生島会長】

はい、ありがとうございます。進め方ですが、まず最初に、今、説明がありましたことについて質問がありましたらお願いしたいと思います。今の説明に関して何か質問はございませんか。よろしいですか。途中でもまた質問していただければと思います。

引き続き、意見交換ということですが、今事務局から説明がありましたように、私も進め方についていろいろご意見も申し上げました。それである程度皆さんが関心を持っておられるテーマを絞って、まずはこれに関してご意見を承っていこうと思います。

先ほど説明がありましたように、この審議会は、今回と第3回目で終わりということがあります。実質的な審議は、今回が一番重要なかなと思いますので、皆様方からの活発なご意見をお願いしたいなと思います。

それでは、テーマを3つに絞りましたけれども、テーマから少し外れるということも、もちろん結構でありますので、意見交換をしたいと思います。

まず、この3つのテーマに関連して、ご意見を賜りたいと思います。

せっかくですので、今日は1回以上全員の皆さんに発言してもらいたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

まず、笠師委員お願いします。この3つのテーマに関連してご発言いただければ、1番目、2番目、3番目っていうことではなくて結構です。

#### 【笠師委員】

1番から3番に関わってくるのだと思いますが、特に子どものスポーツにおいて環境整備というのが重要なかなと思っています。過去の審議会でも発言がありましたけれども、例えば北海道の中で使える施設の状況をネットワークという形で発信ができると、大分皆さんが助かるのではないかなと思っています。

例えば、私は冬の競技にも関わっていますけれども、リンクが使えないけれども、もう一方こちらでは、使えるという情報があれば、そういった選択できるんですけれども、そういった情報を少しかぶらせるということが必要だと思います。

それから別用で、網走の方にスポーツ関係で出張した時に、立派な陸上競技場があったのですけれど。車で行くとあまり問題ないかもしれませんが、公共機関を使いますと陸上競技場までのアクセスが全く記載されていない。小さいことですが、そういった環境整備ということを中心にいくと、既存の施設の有効活用、ひいてはお子さんたちが身近に使える施設とか、それからスポーツの機会を得られるのではないかなと思います。

最初の口火として発言させていただきます。

#### 【生島会長】

ありがとうございます。せっかくある施設が分からないとか、その辺の情報をきちんと共有できるような仕組みというところですね。

私の方で石井委員にお伺いしたいと思うのですが、私自身は、中学校の部活の地域移行というのが非常に大きなテーマになるかなと思っています。

国の方の考えが、来年度からスタートさせようということですのでございます。この、第3期北海道スポーツ推進計画も来年からスタートということで、その意味では、非常にタイムリーな話題なのかなと思います。

それで、石井委員については先ほどお話がありましたように、サッカーに深く関わって

おられて、私が見るところサッカーについては、中学校の部活ではないかたちでの中学生年齢のクラブ活動は、中学校の部活ではなく、クラブ活動が盛んなのかなというふうに思います。

そういう観点から、中学校の部活とそれではない民間のクラブとしての活動、その辺の現状や課題などについてお話しいただければと思います。

#### 【石井委員】

サッカーは、ここ数年代表チーム強化も進み、ワールドカップにも常に行くような競技になりましたが、特にＪリーグができてから、飛躍的にサッカーは競技力が上がったのですが、トップリーグができたというだけでなく、Ｊクラブに義務づけたのは、育成組織を充実させるということだった。

特に、それまでジュニアユース、中学校年代の強化というのは、中学校の学校体育に頼っていました。ところが、クラブができ、そういったＪクラブがチームを作った。町クラブも負けじとチームを作ってきた。それが一番大きいです。

どういうことかと言いますと、今まで、小学校までサッカーを続けていて、中学校に上がりました。ところが中学校でサッカーの先生がいない状態になると、サッカーを辞めてしまうのです。そういう環境でした。それから違う部活に移る。そうではなく、クラブがあったら、そちらで競技が続けられる。また、いろいろな中学校から来るということで、部員数も増えてチームも成り立つ、そういった流れがサッカー界をお支えてきたと言っても過言ではないと思う。

今女子は、逆にそのクラブが非常に少なく、課題として今あるのは、女子の中学校のクラブを増やしたいというところにあります。小学校まではものすごく増えてきました。ところが、中学校になると指導者がいなくて、クラブがなくて、辞めてしまうという現象が起きています。その割には、代表チームが非常に頑張っているのですけれども、トップは、生まれているのですけれども底辺を広げるということが、今後、必要じゃないかと思っています。

そういう意味では他の競技も参考になると思いますし、今、学校体育から社会体育に移行するという話が進んでいるのですけれども、そういった中でもいろいろ課題が見えてきているのですね。例えば、グラウンドはどうするのだ、学校体育に今まで頼っていたその施設はどうなるか、外部指導者になった時には、普段の部活とどうやっていこうかと、そういった課題を一つ一つクリアしながら、次のステップに今いっているのではないかなという気がします。

#### 【生島会長】

ありがとうございました。サッカーというスポーツについては、地域移行がある程度進んでいるという状況があるかと思っています。学校現場ということで、中山先生もサッカーをおやりになっているわけですが、今の石井委員の発言を受けて、中学校の部活の地域移行について、何か、例えばサッカーでもよろしいのですけど、いかがでしょうか。

#### 【中山委員】

まず、前回1回目の会議の中で、運動部活動、中学校はなかなか大きな問題なので、是非、子どものスポーツの継続性という観点で取り上げていただきたいとお話を申し上げたところ、今回骨子案の中にも取り巻く環境として、運動部活動改革を大きく取り上げていただき、また細かな資料までいただきまして本当にありがとうございます。

今サッカー協会の石井専務からお話ありましたとおり、サッカーはクラブチームの仕組みができ上がってもう30年近く経ちますので、比較的他のスポーツよりは学校体育に依存

する割合は少ないのかなと思っておりますが、やはりすべてのスポーツ全体で考えると、かなり大きな問題であって、今の種目ごとにいろいろな取り組みの方法を検討しているところではありますが、まだ先が見えないところでもあります。

ですから、今この時点でどういう形がいいというお話は具体にはできないのですが、今同じタイミングで、道教委でも運動部活動についての会議を行っておりまして、まさにその運動部活動のあり方を今並行して協議しているところです。

私もどうしても両方深く関わる問題でありますし、今まさに現在進行形の問題でありますから、皆様方のお話を伺いたいなと思って、両方の会議のお話を聞いておりましたが、是非、北海道の中においても、環境生活部スポーツ局の皆様が取り組まれているスポーツ推進の事業と教育庁が取り組まれている部活動のあり方検討という部分をリンクしていただいて、いろいろな形での調整をいただくのが非常にありがたいと思っております。以上でございます。

#### 【生島会長】

はい、ありがとうございます。では他の皆さんいかがでしょうか。今中学の部活動の話ばかりですけども、もちろんそれ以外でも結構です。

ランダムで恐縮ですが、佐々木委員いかがでしょうか。

#### 【佐々木委員】

部活の話をしようと思ったのですが、違う観点から、スポーツ参画人口の減少関係ということで、裾野を広げていかなければいけないということが課題としてあると思います。人口自体が減っていくというのはある程度は仕方がないということで、その中でスポーツに関わっていく人達の割合を増やすというか、選択肢を増やすというか、そういうことも非常に大事なかなと思ってるところです。私の言うことがどこにどう反映されるか分かりませんが、例えば観光だとか、いろいろな分野との連携だとか、そういうような視点も必要なかなということをおもいました。

部活の関係になりますけれども、例えばサッカーだとか、野球だとか、いわゆるメジャーな競技については、ある程度、地域移行も進んでいくと思うのですが、そうじゃないもの、この前のオリンピックでもありましたが、新たな競技、例えばスケボーだとか、そういうような、これから、子供たちが取り組みやすいような、そういうような競技なども少し取り入れるような形で選択しというか、関わる人達の裾野も広げていくことが大事なかなと感じました。以上です。

#### 【生島会長】

ありがとうございます。それでは引き続き恐縮ですが、山崎（佳）委員お願いします。

（リモート参加の山崎（佳）委員の通信状態が悪く会場に音声が届かない状況）

山崎（佳）委員の通信状態が悪いようなので、調整をさせていただきます。

それでは和寒町の渡邊委員、お願いします。

#### 【渡邊委員】

それでは地域の観点から説明させていただきたいと思うのですが、現在、和寒町も少子高齢化ということで、かなり小学生、中学生の人数が減っているのですが、その中で、大人数のスポーツ、野球もサッカーも含めてですけれども、できなくなっています。他市町村と合同ですることが増えてきております。

どうしてもそういった市町村へ足を運べないということになれば、個人ということになって、少しずつ個人の競技になってきてしまっているのが現状であります。



その中で小中学生へのアプローチはなかなか限界があるなど思いまして、スポーツ協会でも高齢者もなかなかスポーツから離れていくということもあるので、この高齢者を逃がさないような対策をしまして、現在、高齢者へのニュースポーツの体験というか提供をしているところであります。

3番の障がい者スポーツとも関わるのですが、現在ではボッチャとか、そういったものでやっておりますので、なるべくスポーツを選択していただいた方を逃がさないということも一つの方法であるのではないかなど思いまして、意見とさせていただきたいのですけれども、できればこのようなかたちに移行したいというのが、意見でございました。

#### 【生島会長】

渡邊委員ありがとうございます。ちょっと私から質問ですけれども、小中学生の多人数の種目が町内で成立しないというのは、それは1つの中学校では成立しないという意味なのか、和寒町全体で成立しないという意味なのですか。

#### 【渡邊委員】

和寒町と周辺では剣淵なのですけど、成立しないので和寒から剣淵に行って、和寒・剣淵合同チームとか、そういったようなかたち形になってしまうのです。なので、少しずつ、剣淵に足を運ばない親御さんがいるところは、個人のスポーツに移行してしまったりだとか、スポーツを断念してしまったりという環境になっているということですね。

#### 【生島会長】

分かりました。ありがとうございます。今、部活動の中で議論なっているのは一つの中学校でチーム編成ができないというのが、札幌なんかはそういう話があるのですけども。

道内市町村において小さな町村においては、その同じ町の中で、チームが編成できないという現状がある。そういう理解でよろしいですか。

#### 【渡邊委員】

そうですね。市町を跨ぐようなチーム編成になってしまっているということです。

#### 【生島会長】

はい、わかりました。ありがとうございます。

それでは長田委員、よろしいですか。

#### 【長田委員】

私は障がい者スポーツについて考えてきたのですが、まさにこの3つのテーマに大きく関わってくると感じています。

というのは、まず先日の北海道マラソンと共催されたはまなす車いすマラソンに出場してきました。そこで感じたのですが、1キロ2キロのショートレースには40名参加されたのですが、ハーフマラソンが37名のエントリーがあつて、10名キャンセルして、実際に27名でしたけど、そのうちの道内の選手は男性が私1人でした。女性は1人でこの方は、もともと神奈川にお住まいの方で、引っ越しされて、今年、北海道の選手として出場されました。

そこで感じたのは、せっかく北海道の大会で、地元の選手が出場しないというのは、やっぱり、事情があるのかもしれない、コロナの不安があるのかもしれないが、そのままだとやっぱり将来的に大会が行われなくなるのではないかという危機感を感じました。

徐々に開催される車いすマラソンの大会でも競技人口が減少してきているということ。

もともと障がい者スポーツは競技人口が少ないというのが課題だというふうに言われておりました。

各競技団体が体験会を開いているのですが、なかなか増えないというのが、現状だと聞いております。何が問題なのか、ちょっと私なりに考えてきたのですが、例えば障がい者スポーツを体験したくても競技用の車いすを使うとか、冬だったらチェアスキーを使うとか、体験するにもいろんな問題があって、その用具が高額だったり、どこで体験できるか、体験できる場所までどのように行くのか、いろいろ問題があり、導入の部分でハードルが高いかないというふうに感じております。

以前、私もシットスキーの体験会に行きまして、冬場、家に、閉じこもりがちの人を外に連れ出すことが必要だという、ところが、まず大変で、また障がい者の方の体験会を開催するにも、ボランティアの確保も必要でした。

やっぱりそういうところが非常に難しかったのですが、終了後、子どもたちにアンケートを取ると、体験できて楽しかったという回答が多かったですね。楽しかったという印象を与えることが、良かったですけど、その後、競技をして続ける人がいるのかと考えると、そこがなかなか、競技を続ける人が少なく、やはり、継続してフォローしていける体制を作っていかなければならないと感じます。

やっぱりコロナのうちは難しいところあると思うのですが、骨子の中でも危惧されてますけれど、やはり競技人口を増やすには情報発信をして、障がい者スポーツの認知度をもっと上げていくことが大事と感じました。一方でファンを増やすというのが大事になってくるのではないかと思います。

ボッチャとか車椅子バスケットとか、車椅子のカーリングもありますが、その人たちは健常者の方々と一緒に練習したり、その競技を楽しんでるということを知りました。そこが一つキーになるのかと思っていました。

東京パラリンピックで障がい者スポーツの認知度が上がったというふうに言われてますが、それが継続してできるようにならないといけないということで、健常者とか高齢者とか、いろんな人たちと一緒にスポーツをしたい障がい者が連携してできる機会を増やしていければと感じました。以上です。

#### 【生島会長】

ありがとうございました。ボッチャは健常者と一緒にできるのですよね。  
山崎（佳）委員大変お待たせしました発言、よろしく申し上げます。

#### 【山崎（佳）委員】

運動部活動の関係になるのですが、スポーツ庁長官の方からスポーツ協会ですとか、中体連ですとか、スポーツ安全協会の方に要請があったと思うのです。

地域スポーツ活動の実施主体ですとか、指導者の質、量の確保などの要請があったと思う。

大会に関して、非常に課題があって、先ほども話題になった小さな町ですといくつかの町が中学校部活動、特に団体競技に関しては、複数校で出場するということがあります。

そういった場合に、どのように対応できるかということですが、週休日の合同練習などは、各校の先生が引率しなければならないといった規定を設ける地区があるなど働き方改革から考えると矛盾しているようになってしまっているというのはあります。

コロナ禍における大会出場の際の確保というのが、来年度からというのであれば、早めに規定を整備して欲しいというふうに思っています。

スポーツ参画人口ですが、高齢化が非常に進んでいます。小さいところはなおさら。一方で小中学生の体力の低下が課題であり、幼少期から、運動習慣とかスポーツに関わるよ

うな活動を系統的に進めていかなければならないと考えております。

### 【生島会長】

山崎委員ありがとうございました。

私も不勉強で申し訳なかったのですが、地域社会が学校部活動を地域が支えていくといったときに、地域という概念が一つの町村では間に合わないというか、複数の町村を跨がるような地域を想定していかなければならないというお話がありました。ありがとうございます。

他にいかがでしょうか。星委員いかがですか。

### 【星委員】

北海道レクリエーション協会から参加させていただいております星と申します。

まずテーマの①のスポーツ参画人口の減少についてですけれども、話の中でもいくつか出てきていたかと思うのですが、スポーツと言うと、やはり競技スポーツがイメージされるかなと思います。スポーツ参画人口の減少をどうするかということ考えた時に、いきなり競技スポーツの方にどんどん子どもたちを導きましょうということになっても、難しいのではないかと思うのです。子どもたちの体力も状況が悪いというお話がありましたけれども、まずは、何かの競技をやるということよりも基礎体力を少しずつつけていくべく、何か楽しい体験、どんなスポーツでもいいけれど何かを体験したときに、楽しいと思わなければ、もう次はないと思うのです。楽しくないからもう行かないとなるのですよ。

逆に楽しいというのは、次への意欲などに繋がると思います。例えば、環境なども考えると、グラウンドがなければ駄目だとか体育館は空いていないとなると、またいろいろな制約があると思います。どこでも誰でもできるそういった、昔などは歩け歩け運動とか、そういったことがあったと思うのですけど。

別の資料で、今、日本の国民が体を動かすことで、一番はやっているのが、ウォーキングや散歩。散歩は、スポーツではないというようなお話もありますけれども、まずはウォーキングをやってみるとか。何か気楽にできるような、親子できるそういったものに着目して、北海道としてもキャンペーンみたいなことをやるとか。そんなことを考えながら、ボトムアップしていけないかなと。体を動かすことが楽しいということが分かってくれば、ちょっとこの競技をやってみようかな、野球やってみようかなとか、サッカーやってみようかなというふうに、向く可能性が増えるのかなというような気はしています。

僕はレクリエーション協会ですので、どちらかという競技というよりは、楽しく体を動かして、体力もつけるというような、意欲につなげていくというそういう取り組み方ですので、そういうことをすごく感じます。

それから、②の子どものスポーツ、またスポーツに親しむ環境についてというところでちょっと頭に思い描いたのですが、Eスポーツというのは、今度のオリンピックのパリ大会に正式種目に確かなるというような話だったのですよね。テレビとかでEスポーツに取り組んでいるそういう番組を調べた時があるのですが、賞金をゲットするかというようなこともあるのですが、僕の主観で否定的な部分もありますが、そのEスポーツというのはどんなふうに北海道として考えているのか、本当に体力的にも、もう純然たるスポーツですよというような理解でいけば、子どもたちは、環境さえ整えば、そういったゲームみたいに取り組めるので、意欲はすごく持っているのではないかと思います。

最後に一つですけれども、第3期北海道スポーツ推進計画の骨子案なのですが、その二番のところで、単純に思ったことなのですが、「北海道ならではの特色を生かしたスポーツによる地域の活性化と共生社会の実現」ということで、(1)から(3)まであります。今後の取り組みの方向性として、丸が2つあります。その1つ目の丸のところなので

すけど。「スタジアム等を核としたまちづくりへの協力と食や観光といった魅力の発信」。北広島に来年オープンするボールパークですか、こちらの話も出たかなと思うのですが、地域の活性化とか、それから北海道ならではの特色を生かすというようなことをとらえると、どうもこの文言が、何かあまり主張していないというか、弱いような気がします。確かにこのタイプのイメージは持ちますけれども、そしたら、他の地域でこういった核になるものが、これからたくさん出てくるのか。そういう感が出てきたからといってそれは、北海道ならではの特色なのかと、何かちょっと弱い気がします。

#### 【生島会長】

はい、ありがとうございます。最後のお話は2で書いてある「北海道ならではの特色を生かしたスポーツによる地域の活性化と共生社会の実現」というお題目と、取組の方向性がちょっとマッチングしてないのではというイメージですか。

#### 【小野寺委員】

小野寺でございます、よろしく願いいたします。

今、星委員からEスポーツという話が出ました。私もゲームといえば子どもの頃の遊びの一つだったので、余りスポーツとしての認識ありませんでした。

ただ私も前職、エスポラーダ北海道時代に学校訪問ですとか、特別支援学校とか、そういったところを回らせていただいたときに、唯一、八雲養護学校で、そちらの方は脳性麻痺で、車いすに乗せられているという現状でした。その中で体育というものの関わり方という中で、ちょうどお邪魔したところプレイステーションのウイニングイレブンを子供たちができるとのことで子どもたちにサッカーというイメージを膨らませていただいて、こういったところにEスポーツという関わり方というのは、唯一僕はありだろうなと現場で感じ、またそういったものを見た後にまた体育でフットサルとかサッカーはこうやってやるのだよといって見せてあげると、喜びを見せてくれたという経験がある。そういう意味では、使い方なのだろうなということを感じて自分の実績の中で感じてきました。

また、この学校という現場でいきますと今後部活動がというところで、地域移行していくというところでは、もちろん、先ほど言ったとおりサッカーというところでは、いろいろな指導者がいて、競技人口が非常に多いので、いろいろな方々が学校にお邪魔してというイメージが付きましますけれども、とはいえ学校という組織の中で、ただ僕が否定的なのかもしれませんが、本当に土日や休日という部分で、その地域の方々が指導に来るということが、本来の学校や集団づくりの中で、果たしてどうなのかなと。もちろんスポーツに関わるということを考えれば、部活ができるよとか、休部にしなくても済むよとか、そういったイメージも聞きますけれども、でも本来学校として部活動とか集団活動をつくるという意味では、果たして学校というものがその地域の人たちに預けているのかというところでは、いろいろな不安もあるのかなというふうに思い、これがすべて肯定的に進むものではないし、持続するのかなというところに関しては、非常にやっぱり考えを一新しなければいけないところがあると思います、学校との関わりというところで、じゃあどうだというところが、これはかなり結構引っ張る課題になるのではないかなというふうに感じてます。その中でやはりこの北海道で新しく7月に話し合いましたそのスポーツの集いといいますか、みらい会議というのが行われるという、やはりスポーツ、特にコロナ禍という中で、私も、例えば札幌から離れた地域、ちょうど2年前にコロナがやはり始めたよと、やはり札幌から来ないで欲しいとか、やはりコロナは小さい町で、でてしまうと、関わった方々も非常に片身が狭い思いをするから、イベントをやらない方がいいという、傾向にあったと思いますけども、徐々にそこはもちろん改善されていくと思うのですが、大きくそういった行政ですとか、プロスポーツやオリンピックだったり、また民間

企業の皆様、要は地域一体でいろんなことを改善していけば、スポーツ関わる機会が増えていくのかなという中では、非常にこの骨子を作る中でこのみらい会議というのが非常に明るい材料になるのではないかなというふうには感じてますので、学校も含めて、また地域差、学校によっては大きい、競技人口の多いスポーツができないと言いながら、こういったイベントを通じながら皆さんが関わることで、スポーツに携わって皆さん感じていけば、また北海道のスポーツは明るくなるのではないかなと思いました。私からは以上です。

#### 【生島会長】

ありがとうございます。ちょっとEスポーツの話が出たので、何かEスポーツについて、見解はございますか。

#### 【事務局】

Eスポーツに関しましては、昨年の情報ですが、国の方でも日本学術会議の方に諮問しておりまして、Eスポーツはスポーツかというストレートな諮問をしておりまして、実はその時に、学術会議の方から、肯定的な部分もあるが、否定的な部分もあるということですよ。

どういうことかということ、反射神経などを養う部分については、Eスポーツは有用ではあるけれども、Eスポーツひとくくりにした時にゲーム依存症の問題でなどが見受けられるとか。そういうものについては、十分気をつけなさいよといったような答申を受けて、私の方でスポーツ庁についてどのような進捗で進んでいますかとお尋ねした時に、答えが出ていないよ。

スポーツ庁だけではなく、経済産業省とか、文部科学省とか、3省で検討進めているけれども、まだスポーツとして、Eスポーツを定義するという答えが出ていない状況です。

#### 【生島会長】

ありがとうございます。世界的に見るとEスポーツは公認される方向性で進んでいるように思いますが、この推進計画の中ではっきり取り上げるのは、やや難しいというイメージですかね。

様々なご意見が出ましたので、そのことをしっかり受け止めなければなと思います。

#### 【千葉委員】

2件ほどお願いしたいと思います。まず、運動部活動の地域移行についてです。先ほど小野寺さんからお話あったところと少しかぶるかも知れませんが、私も実はスケート連盟から出てきておりますけれども、高校の教員を随分長く携わっていたものですから、体育でずっといたものですから、学校の部活動は元々恐らく日本のスポーツは学校体育がメインだった。学校体育がずっとあって、小学校は別としても、中学校の部活動があって高校の部活動があって、そこから大学に行ったり職業団にいたりプロになったりして世界で活躍してくる。元々の日本のスポーツ界というのは、ほとんどの種目が、学校体育からスタートしていた。ただこれが今、地域の方に移管していくというのは、時代の流れで全くおかしいことではないと思うのですけれども、教員の時間外勤務の縮減だとか、教員の負担軽減だとかということで、地域に移行するのも当たり前ですし、ただ、学校の先生方が専門性がないというのは、これはもう当たり前の話であって、私も人事の制度に携わってきましたけれども、部活動で人を引っ張ったり出したりすることは最後の最後の調整段階であって、その学校にその専門の先生が必ずいるかということそうではない。私も体育の教員で、専門はスピードスケートですけれども、教員時代は全く畑違いの運動部を5つもってました。柔道、陸上、アイスホッケー、山岳、いろいろなものを行った先、行った先で。しかたのないことですが、専門性はないです。こちら辺は中学校も同じだと思いますが、やはり土日がほとんどない生活をずっとしてきて、今は望ましくないのは分かるのですけれど

ども、やはり、全く素人なのだけれども、一生懸命やることによって、生徒との凄い信頼関係ができて、うまくいっていくという形なのです。そういう形が今も何となくのイメージなのですけれど。そういう意味では、土日に専門の方が付くのは技術的には問題ないのですけれども。やはり学校の部活動で指導してるのは、競技そのものだけのレベルではないということですよね。あくまでも、競技生活を通じて、例えば、具体的にいくと礼儀だったり、言葉遣いだったり、それから協調性だったり、協働性だったり、あとは古い言葉で言えば〇〇〇、そういうのを何とか子どもたちにつけさせて、全員が全員オリンピックを狙っている訳ではないので、やはりそういった学校での部活動の意義というのは非常に大きいと思います。

それで外部指導者という形をとっても全然問題ないのでけれども、この部分で書いてある指導者の確保。当然、指導者の確保とあと指導者の質の確保というのはすごくこれから大事になってくるかなと思います。個人的に学校で経験があるのですが、仕事ながら一生懸命やっていた先生のところ、外部指導者をつけた、外部指導者は勝利主義、保護者はそのコーチにべったり、その通りその通りとあって、子どもたちもその通りと。そこに学校の先生がいて、例えば礼儀だったり、生活態度とかダメであった時に指導した時に、もう指導にならない。そうやって部活が崩壊していく、そういう実際の場面をよく目にしています。ただ公務員・先生と指導者の立場を基本的にわきまえたり、共通理解でうまくやっているとちゃんとなるのです。そういう意味で地域に移行する場合については、あくまでも指導者の質の確保というのも凄く大事になってくるかなと思います。

それともう、今の子どもたちは、余り専門性とか、競技力がレベルが高過ぎてしまって、小さい頃から一つの競技しかできない状態ですよ。昔は、小学校の時にマラソンに出て走ったり跳んだりして、早い者が例えば陸上の大会に出たりとか。夏は野球だったりサッカーやって、冬はウィンタースポーツやってる子とかたくさんいたのですよね。その中から、強いのが専門性、中学校ごと、職場に来るということだったのですけれども。今は恐らく、小学校のレベルで、何かの少年団、クラブチームに入ってしまうと、恐らく他のことはできません。恐らくそこまでの時間的な余裕も体力的な余裕もきつくないぐらい絞られてくると思います。そういう意味では、その他に、やはり保護者の負担とか。私どももそうなのですけれども、例えば少年団に入ると送り迎えから、遠征の付き添いから、監督・コーチの世話まで保護者の役割分担を決められて、保護者が先にまいってしまう、辞めてしまう。そういうのも往々にしてあります。それから子どもたちも余りにも競技のレベルが高過ぎて、昔は中学校に全国大会は無かったですよね。小学校でも今は全国大会やります。そうなっていくと、やはり全道、全国で活躍する選手だけしか残ってきません。どうしても、余りにもレベルが高いので、かけ離れてくるともうみんな辞めちゃうという状況です。恐らく気軽に誰でも継続して運動をやるということが、もうガンガン専門性を問われていて、こぼれてきたものはもう辞めちゃう。ちょっとそういうのが、最近はある程度トップレベルを育てるためには、ある程度エリート教育というのにも必要だと思います。卓球とかバドミントンとかスケートとかもエリートアカデミーとあって帯広に高校生から、全国から集めて通信教育にして日中はガンガン練習やってということもやっています。そういうのでオリンピックでメダル取るというの痛し痒しでどうしようもないことなんですけれども、基本的には、誰もが気軽にスポーツをできるということが、やはり底辺拡大には凄く必要。そのためにも当然、施設・設備、ハードの部分も必要になってくるのかなというふうに思っています。

それでもう一つ、最後に、骨子案の中で一番下の方に、「セカンドキャリア形成に向けた引退選手の活躍機会の拡充」とあります。これも非常に大事で、実は例えばスケートの方でお話すると、北海道で育った選手が、他県で凄く活躍します。ということは、国体なんかは今年も勝てませんでしたけども、それでは他県で活躍しているのは誰かという北海道で育った選手、北海道で受け皿が無い。だから他県で活躍する場を設けてやっていると。ただ今年、札幌にスケートでオリンピックを経験した選手とか、オールオリンピアンズのお世話で、現役の選手をサポートする形で4名ほど、札幌市に勤めていますけれども、やはりそういうのを非常に、セカンドキャリアという引退した後の事もそうですけれども、今、経済状況で色んなスポーツが会社からカットされている状況がありますので、そういう辺りもですね、何かサポートできれば、非常に北海道の競技力とか底辺の拡大には非常に大事になってくるのではないかなというふうに思いました。以上です。

### 【生島会長】

はい、ありがとうございます。増山委員お願いします。

### 【増山委員】

主に1つ目のスポーツ参画人口の減少に対してというところを中心に考えたのですけれど、合わせて、障がい者のこととか部活動のことを合わせて、まず、部活動の地域に移行というときに競技主体で考えていくと、やはり現在余りスポーツに親しんでいない子どもたちは、参画するというのが進まないのかなと思いますので、千葉委員や星委員からも出ましたけれど、気軽に、それから目標とするレベルも楽しみ方も多様な選択肢があるということが、大事だと思います。ですからフィットネス系とか、あるいは運動遊び系、あるいは一種目ではなくていろいろな種目を体験するというような、活動が選択できるというふうには思っています。

それから、またここでまた違う部署の話になるとは思いますけど、公園で中高生なんかはキャッチボールやサッカーをしたいというときに、児童公園では小さい子供たちには危険ということで、組織に取り込んでスポーツをさせるのではなくて、自主的にスポーツを遊ぶという場が少ないので、そういう、主体的に運動ができるような、場の開放、公園でも、運動公園という立派なものでもなくとも、球技ができる公園とかそういうものの整備もあると、主体的な活動というのが推進できるのかなと思いました。

それから、障がい者の参画については、人口の7%以上が障がいがあるということで、中途の障がい者も多いです。中途の障がい者の場合、高齢の方も多くて、そこからスポーツに出会って、障がい者スポーツを始めるということは非常にハードル高いので、アダプテッドスポーツという、障がいの有無にかかわらず、また年齢や性別にかかわらず、誰でも参加できるようなアダプテッドスポーツというものを学校教育の中にも取り込んだり、あるいは、お話もちょっと出てきましたけど、ボッチャとか、健常者も障がい者も一緒にできるようなスポーツにふれあう機会が障がいの有無にかかわらず、多くの人が参加できるようなスポーツを広めていくということも、自分がいざ障がいを持ったときに、あれがあったらというふうには知れるいい機会かなと思いました。

もう一つは、障がいの中でも、精神障がいの方の場合には、そのスポーツが組織化されていないということもあって、障がい者の参加率を増やすといった時に、その障がいの種別によっても、非常に参加が難しい、取りこぼされている人たちもいると思いますから、その辺りも細かく、目を向けていく必要があると思います。

それと、学校の部活動もそうですけれど、障がいのある特別支援学校の生徒なども卒業後に地域のスポーツ活動あるいは身体活動するような場が途切れてしまうという接続の問題があると思います。そういう意味でも、部活動の地域移行というのは非常に卒業後も運動継続できるというところでは、期待ができるというふうには思っています。

### 【生島会長】

全員の方がご発言いただきましたので、これからは好きにお話ししていただいて結構だと思いますが、私の方から1点問題提起というか、すいません私、中学校の部活動の地域移行に非常に興味を持っているものですから、恐縮なのですが。ちょっと私が考えたことはですね、中学校の部活動というのは、今、ものすごい資源が投下されてきたということだと思うのです。それは、人的資源、先生がかかわっているという人的資源、それを物的資源、学校の体育館であるとかグラウンドであるとか、そういう資源、それと、学校というものが持っている信頼性とか、地域が学校に対して信頼を持っていると、こういうような多くの資源が費やされて、部活動というものが成立しているのかなというふうに思い

ます。その後、一気に地域に展開するというのは並大抵のことではないなというふうには思っています。それで国の計画では、とりあえずは、休日の活動から段階的に進めていこうと言っているわけですが、最終目標は、学校の運動部活動はなくなるというのが理想系というか、方向性なんだろうなと思います。これはものすごく大変なことなのだろうなというふうには思います。一つは、義務教育の中で行われてきたということですから、その延長で行われてきたということですから、親がお金を持ってるのか持っていないのか、そういうことに関係なく、できていたのではないかなと思います。それが地域にいった場合にですね。地域の活動が経済的に成り立つためにはやはりそれなりの負担というのが当然生じてくるのかなと。そうなった時に、どうなるのかなというのが一つあるのだと思うのです。これについて中山先生はいかがですか。

#### 【中山委員】

生島会長には本当に関心をお持ちいただきありがとうございます。正直な話、中体連としましても、北海道中学校長会といろいろ連絡調整をとりながら、次年度に向けての方策を検討しているところではありますが、何よりもやはり僕らの方で優先しなければならないのは、来年の中学生のスポーツ活動に空白を作らないということが一番重要なことではないかと思っております。ちょうど今から2年前、令和2年にコロナで全国の中学校の大会、夏場の大会全て中止となりましたが、そんなことにはならないように、やはりできるところからやっていくしかないのかなと、具体的話で申しますと、北海道教育庁で作られている資料によりますと、今、全道の部活動の中学校の部活動、約3割程度、780程度の部活が全て合同チームになっていて、単独の学校では、部活動ができない状況になっているとお聞きしております。ですから、私ども中体連としましては、単独チームというたがをなるべく外して、町ごとの拠点校方式ですとか、あるいは複数の部活動の合同となったチームについても参加できるような大会のあり方を検討するとともに、やはり、教員が実際に土日は兼職兼業という形で、同じ部活に関わることが、一番現実的な線かと考えています。全国各地でいろいろな話を聞きますとやはり、どこも土日だけ別の方が来て指導するというのは現実的ではないという話が出ておまして、となるとやはり先生方に土日は地域のスポーツ指導者として、何らかの形で兼職兼業の形をとって、徐々に国の言っているような形に段階的にシフトしていくというのが現実路線なのかなと考えております。ただこれについても、具体の手法ですとか、あるいは財源については、全く目処が立っておりませんので、先ほど申し上げたとおり、まず目の前の子どもたちが、来年、スポーツに関われないようなことだけは避けるような形で、いろいろな方の協力を得ながら進めていかなければならないと思っております。答えになってないかもしれませんが、以上でございます。

#### 【生島会長】

また別の観点ですけども、一番最初の審議会のときに、道のスポーツ推進条例の話が出て、セカンドキャリアというのが、非常にオリジナルな条文として出たという話がございしますが、事務局に聞くような話なのですけど。このセカンドキャリアの問題と、地域における指導者不足との関連性というところ。非常に都合のいい話にすれば、セカンドキャリアを生かして、地域の指導者として活躍してもらえるような道を探るのが一番分かり易いというか、安直なのですけれど、これについては。

#### 【事務局】

全くその通りでございます。一方で、セカンドキャリア問題。引退選手をどのように、財産としてとらえてですね、今後行っていくことについては、行政単独では限界がござい



ますので、多様な主体の方々と一緒にこのセカンドキャリアの問題を実は考えていきたいと思っております、できるだけ引退選手の活躍機会を増やすような、皆さんがそれぞれ持っているいろんな場面とか、できるだけ機会を増やしていただきたいとそういうふうに思っております。その部分で、例えば、一方で、指導者が不足しているといったところに、キャリア対策が気持ちよく充てられるのであれば、大変結構なことであると思えます。

#### 【生島会長】

小野寺さんエスポラーダの監督もやっておられて、選手を引退後どうするかということで、お考えになったことがあると思うのですけれどもその点いかがですか。

#### 【小野寺委員】

やはり指導者になって、地域に貢献したりですとか、例えば、エスポラーダというのは、北海道出身で固めているチームなので、地元に戻ってという話になった時に、中々かやはり学校系とか部活系にももちろん協力をしたと言いつつも、やはりボランティアではやっていけませんので、その雇用という問題が当然関わってきますし、この雇用というものが仮に今後、子供たちの部活ですとか、学校のスポーツ、体育とか、そういったことに関してやはり民間企業と一緒にあって、雇用を受け入れてもらいつつ、学校現場に入っていけるような体制が取れるとか、こういったことが起きなければ、単純にその地元に戻ってきたから、お手伝いしてといっても、1年はもつと思うのですが、やはり本当に良い環境に行ってしまうとか、お金を貰っているところに行ってしまうとか、本当に選手とか、選手のことを悪くは言えないのですけれど、やはり当然生活がある中で、簡単に裏切ったりもするので、いろいろな地域に還元をしたいとか、思いはありながらも、その辺の整備がされないと絶対に実現は難しいのではないかと感じています。

#### 【石井委員】

セカンドキャリアに関して言いますと、選手として終わった、そのあとが視聴者ということではなくて、サッカーではフットボールファミリーと言っているのですけれど、審判に行ったり、フットサルに行ったり、トレーナーに行ったり運営に関わったり様々な生かしかたがある。そういった可能性を、どこのタイミングで、スイッチを入れるかというところで、可能性としては非常に広げてあげたいなというところで、例えば、今、高校のチームなんかで、例えば、百人いました、試合出るのは11人、それ以外の選手はどうしてるのか、チームに関わるためには、選手だけじゃないいろいろな形でチームをささえるということの延長にそういった道があるという考えでありますので、そういった道を、大人たちがいろいろ示してあげる、あるいは作ってあげるということが大事だと思います。

#### 【生島会長】

セカンドキャリア、もしくは指導者の確保という点で何かお話でございますでしょうか。他にいかがでしょうか。

#### 【石井委員】

先ほど北海道独自の進め方という話で、皆さんのいろいろな意見の中で、北海道ならではの普及とか、地域性という話があったと思うのですが、これからはいろんなスポーツが一緒になって、協会の垣根を越えて、子どもたちにアプローチしていくということが必要だと思います。そうではなくても、少子化で、全体の人数が少なくなっているその中で、各競技団体が選手を取りあうというのではなくて、ゴールデンエイジの前、要するに小学校

や保育園の年代にいろいろなことをやらせて、例えばサッカーをやってもいいけど、違う団体と一緒にイベントをやってみるとか。そういう北海道独自のやり方というか、それは海外でも北欧とかヨーロッパ、アメリカなんかもそうですけれどもシーズンによっていろいろな競技を分けながらやって10歳になってどうするかというのを決めるとか。そういうようなやり方をしているということがたくさんありますし、逆に降雪地域がハンデではなくて、それをポジティブにとらえた発想というのは必要だと。サッカーのA代表は、今、ワールドカップの準備をしていますけれども、そのメンバーは小さいころからエリートでそのままA代表になっている選手はいません。どういう選手かということ、小さい頃は器械体操とか、あるいは陸上競技と並行してやっていたりとか、そういう選手ばかりです。逆にエリートでやっていた選手がバーンアウトしてしまったとか、いつの間にか消えてしまったとか、そういうケースの方が多いです。なので、先ほど千葉さんもおっしゃっていましたが、スポーツをやらせながら、次のステップに行くというそういう流れを作りやすいのではないかと思っています。そのためには、大人たちが、各競技団体を越えた協力し合った体制を作ることがまず大事じゃないかというふうに思います。よく野球とサッカーと言われるのですが、野球はサッカーに競技人口を取られていると言うのですが、我々サッカーから考えると、まだまだエリート中のエリートは野球に行っています。そういった一つの方向で見ると、考え方が堅くなってしまっているので、もっと競技団体、いろいろ協力し合いながら情報交換を取りながら、いろいろな課題があると思いますので、それを共有した中で、子供たちにアプローチしていくという姿勢も必要じゃないかと思っています。それから施設のことがありますけれども、海外に比べたら、まだまだ室内の施設が日本はまずないと思う。ヨーロッパとか、フルコートのサッカーピッチでルーフ付きの施設というのは、至る所にあります。そういったところでも、スポーツ文化というのは少し遅れているなど。降雪地域いろいろあります。サッカーも今度秋春制になるという、そういう課題をある中で、まず、この北海道がそういう日本の中でも、リードしなければいけないのではないかと考えて、今行政といろいろ掛けあっているのですが、中々この時代に、大きいハコものを作れないということで跳ね返されていますけれども、やはりそういった行政も含めて、そういうところにチャレンジしていかなければいけないというのも、次世代の子どもたちに向けてできることじゃないかなというふうに考えていますので、サッカーの中では、引き続き、そういう活動はしていきたいと思っています。

#### 【生島会長】

様々な意見が出たというふうに思います。特に星委員から話が出ていた、スポーツというか体を動かすことの喜びを広く享受できるような、何かそういうとっかかりみたいな話。それと、それをスタートして、あんまり小さい時から種目を限定せずにいろいろなことをやるような環境を作ったりとか、そんなことも何か重要な気がします。他にいかがでしょうか。佐々木さん今までどうですかお聞きになってきた全般的にご発言いかがですか。

#### 【佐々木委員】

それぞれご専門のご意見のお聞きしまして、こういうことなのだなといろいろ感心して聞いておりました。学校の話に戻りますが、やはり、スポーツ全体の裾野を広げるとか選択肢を持つというのはおっしゃるような、非常に重要なのだなということで、視点とか言い方がちょっと違ったりしますが、ある程度皆さん共通の認識があるのかなというふうに聞いておりました。

**【生島会長】**

渡邊さんいかがですか。

**【渡邊委員】**

運動部活動のことでは勉強不足で、外部コーチをやっている立場でちょっと勉強させていただきたいところがあるのですけれども、今、土日の部活動で先生方にはある程度時間外まではいかないんでしょうけれども、そういったものが出ていると思うのですけれども、地域移行になった時には、町の財源としてそのお金を払わなければいけないのか、それとも道として財源があるのかというのをちょっとお尋ねしたかったです。ちょっと議題とそれるのですけれども勉強させてください。

**【教育庁今村課長】**

はい。道教委の健康・体育課長をしております今村といいます。発言の機会をいただきありがとうございます。いろんな話もでていたので、お伝えしたいこともありましたが、それはそれとして。今、休日の部活動、教員が携わった場合、3時間で2,700円の手当が出ます。この手当、休日の部活動が地域に移行していった時に、それを財源としてその団体に対する補助ができるかどうかというところが、令和2年9月に出された部活動地域移行の中でも議論されているという状況です。今、概算要求が出ていて、その地域の部活動に対する施策みたいなものを打ち出されて、このうち予算案の中でどうやって反映されて行くのかということになっていきますが、現状手当としてはそういった形の手当が出ているということでこれも財源として、その地域移行の取り組みの原資になって行くというようにも検討されているということにはちょっとお伝えしたいなというふうに思っております。以上です。

**【生島会長】**

はい、ありがとうございます。現状では検討中ということですね。ただ、財源は一定程度あるであろうと。他にいかがでしょうか。時間はもうそろそろお約束の時間になってきております。それで最初お話しいたしましたように、今、基本的にその三つのテーマというのを提示して、それに沿ってご発言いただくという流れでご発言いただきましたけれども、それを超えて、今までちょっと話題として出ていないということで、ご発言があればお話ししたいというふうに思います。

**【笠師委員】**

笠師です、ありがとうございます。前回の審議会でも話をさせていただいて、今日はテーマにはなっていなかったのですけれども、女性アスリートの支援体制というのも今後やはり構築していただきたいなというふうに思っております。それで大きな競技団体とか、それから団体、それから大学、グループであると、ある程度サポート体制ができてきているところも多いと思います。昨年、東京オリパラ大会で、私、本業は薬剤師なのですが、その診療所の方で、女性アスリート外来というのを始めてオリンピック・パラリンピックで設置しました。上層部にいけば、サポートするスタッフは完備されていますが、もちろんジュニアクラスからの参加ももちろんそうですけれども、いろんな競技の女性アスリートが入ってきている。ただそこのところで競技の仕事する方はたくさんいらっしゃるし、男性の診療者もいらっしゃるのですけれども、女性のその性周期とかサポートとか、そういったところの診療が中々うまくいっていない。北海道の現状が、全部把握できているわけではないのですけれども、サポートして欲しい人と、サポートする側のマッチングがまずうまくいっていない。また、町の単位で運営されているところもあるので、そういったところがないということで、多くの地方で女性アスリートが活躍

するような時代になってきていますので、将来的には、このスポーツ推進計画の、かなり先になるかも知れませんが、そういったところを含んで体制を検討していただければと思います。以上お願いで意見させていただきました。よろしくお願いいたします。

**【生島会長】**

はい、ありがとうございます。今、現時点でコメントございますか。よろしいですか。

**【事務局（阿部課長）】**

ご発言ありがとうございます。こちらの方の計画の中でも、考えているのですけれども先ほどの骨子案の「女性アスリートや多様な性のあり方に関する理解促進」ということで、やはり女性アスリートについてということで大変重要なことだというふうに考えておりますので、笠師委員からお話があったことについても、これからも引き続き、まだこの推進計画の方については私どももいろいろご意見を聞きながら成案に向けて動かしているところでございますので、それと同様に、女性はアスリートに関する関係についても取り組んでまいりたいと考えております。以上でございます。

**【生島会長】**

その他に、言い足りなかったことがあるという方いらっしゃいましたら、自由にご発言いただきたいと思います。

**【増山委員】**

資料1-3の、この第3期スポーツ推進計画の骨子案としての目指す姿というところで、スポーツを通じた将来にわたる持続可能な社会の実現というのが書かれているのですけれど。その意図は分かるのですが、持続可能な社会の実現、スポーツを通じた持続可能な社会の実現といった場合に、持続可能な社会のイメージが共通理解できているかどうかということで、これが全体の目指す姿となった時に5年間で、具体的に何をもって達成とするのが全く見えてこないと思います。光の3原色を合わせると透明になるっていう感じで、結局何を言いたいのか分からない気がするので、何かもう少し、誰が見ても、共通のイメージが持てるような言葉に置き換えられるといいのではないかなというふうに思いました。意見です。

**【生島会長】**

ほかにはいかがでしょうか。最初に申し上げたことの繰り返しなのですが、実質的な意見を反映させるための場というのは、この2回目が一番重要ということでもありますので、「言っておけば良かったな」ということがないようにお願いします。

**【石井委員】**

骨子案の2番。「北海道ならではの特色を生かしたスポーツによる地域の活性化と共生社会の実現」。これで、やはり先ほども話ありましたとおり、今後の取り組みの方向性でいくと、スタジアムを核としたというのは、北海道の特徴、良いところというのは、そのスタジアムだけじゃないですね。やはりここに書いてあるように、自然だとか、恵まれた自然環境。全国各地、私も施設見てきましたけど、これほどの、例えば、サッカーで使用する芝のグラウンドだとか、あとはこの気候、それから食物。一番は暑熱対策の中で、夏のスポーツをやる時に、今非常に問題になっている。関東で全国大会をやるサッカーなどは、朝の9時から1試合しか行えません。そのぐらい、今、深刻な状況になっています。

今後、例えば夏にいろいろなスポーツをやるに当たってはやはり北海道とか東北に流れて来るという可能性も非常に高いと思うので、現に今シーズンが変わった女子のWEリーグなどはキャンプがどんどん、北海道に来ております。アマチュアのスポーツもそういったケースもあるかと、合宿、全国大会等、そういった環境を生かして開催される可能性も広がってくると思いますので、そういったものも是非、これから取り込んで、地域も取り込んだ活性化をして進めて行ったらいいのではないかなというふうに思います。

#### 【生島会長】

はい、ありがとうございました。他にいかがでしょうか。私最後にネガティブな発言で恐縮ですが、「北海道ならではの」という2番目の項目なのですが、「北海道ならではの特色を生かしたスポーツ及び地域の活性化と共生社会の実現」なのですが、やはり北海道ならではの困難さというものはあるのだというふうに思います。やはり地域が広いということで、札幌に居ては全く分かりませんが、道内の広い地域の中に、ちょっと表現がおかしいかも知れませんが、疎らに住んでいるというような意味で、人が集まるにしても、結構大変だっというような状況があるというふうに思うのですね。そういう点も、やはりしっかりととらえて推進計画は作っていただくのがいいのかなというふうに思いました。すいません、ネガティブな発言で。北海道らしさという和良好的ことばかりということじゃないぞということやはりしっかりととらえておくべきかなというふうに思いましたので、あえて発言させていただきました。すいません。ありがとうございました。では、よろしいですか。それでは議題の審議事項の1については以上とさせていただきます。

それではこれから審議事項の2の審議に入りますが、冒頭お話ししたように、傍聴及び報道関係の皆様には退室をお願いいたします。

(審議事項2については非公開)

#### 【生島会長】

以上で審議事項についての審議を終了します。本日予定をしておりました審議事項については終了でございますが、この際全体通して皆様から発言があれば、お伺いをいたします。よろしいですか。それでは事務局の方に進行をお願いいたします。ありがとうございます。

### ○閉会

#### 【事務局（阿部課長）】

生島会長、それからの委員の皆様ありがとうございました。

本日の審議いただいた議題のうち、審議事項2の北海道スポーツ奨励賞候補者選考、これにつきましては本日の審議を踏まえ、知事が決定することといたします。なお決定まで候補者、氏名等の取り扱いには十分ご留意いただくようよろしくお願いいたします。また選考経過につきましては部外秘でございますので、本日お配りしました奨励賞関係の資料については回収ということにさせていただきますので、机上的の方に置いていただければというふうに思っております。他の資料はお持ち帰りいただいて結構です。

以上をもちまして、令和4年度第2回北海道スポーツ推進審議会を終了いたします。本日はありがとうございました。